

令和 6 年 9 月 24 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02506

研究課題名（和文）コンピテンシー重視の時代における教師教育と教育学の在り方に関する日独比較研究

研究課題名（英文）Comparative research on the state of teacher education and educational studies in Germany and Japan in an era of emphasising competences.

研究代表者

鈴木 篤（Suzuki, Atsushi）

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：70634484

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の枠組みにおいて行われた研究活動からは、日本における教育学の理論的発展過程、日本における教育学の制度的発展過程、日本における教師教育の理論的発展過程、日本における教師教育の制度的発展過程、日本における教師教育に関する近年の議論と改革動向、ドイツにおける教育学の理論的発展過程、ドイツにおける教育学の制度的発展過程、ドイツにおける教師教育の理論的発展過程、ドイツにおける教師教育の制度的発展過程、ドイツにおける教師教育に関する近年の議論と改革動向などが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では歴史的に共通・類似する点を多く持つ日本とドイツの教育学および教師教育の理論的・制度的発展過程に着目し、両者の現状と課題とを明らかにした。日独両国のいずれにおいても、教育学はその当初から教師教育をその存在の基盤としてきたし、専門職養成としての側面を持つ以上、コンピテンシーの育成を一定程度その視野に入れざるを得ない存在であった。もっとも、N.ルーマンの科学論からも明らかのように、教育学と教師教育とは必ずしも親和的でない側面も持つものでもある。こうした点を精緻に解明した点に本研究の学術的意義や社会的意義が確認できよう。

研究成果の概要（英文）：From the research activities carried out within the framework of this study, it was evident that the theoretical development process of educational studies in Japan, the institutional development process of educational studies in Japan, the theoretical development process of teacher education in Japan, the institutional development process of teacher education in Japan, the recent debates and reform trends on teacher education in Japan, the German theoretical development processes of educational studies, institutional development processes of educational studies in Germany, theoretical development processes of teacher education in Germany, institutional development processes of teacher education in Germany, recent debates and reform trends in teacher education in Germany.

研究分野：教育学

キーワード：教育学 教師教育 日本 ドイツ コンピテンシー

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、多くの国々では教育の目標を転換し、特定の知識(コンテンツ)を子どもたちに学ばせることから、ポスト近代型能力や新しい能力と呼ばれるコンピテンシーを習得させることへと変化させている。こうした動きの背後には存在な要因が存在するが、日本をはじめとする国々において、教育の領域でこの変化を最も決定づけたのはOECD生徒の学習到達度調査(PISA)における低順位であった(伝統的に教育に力を入れてきたと自負していたドイツでは教育界に「PISAショック」と呼ばれる社会的動揺が走り、教育学の研究の潮流さえも大きく変えてしまうほどの影響を及ぼした)。

こうした教育目標の転換は大学教育の理念にも大きな影響を及ぼすこととなり、日本においては教養教育などがその意味を急速に変えつつある。本来は全人的調和という労働と直接的には結びつかないものとして存在した教養教育の目標が、急速に労働との結びつきを強め、まるで経済的生産性の向上のみが大学教育の唯一の目標であるかのように捉えられる状況さえも生じているのである。

このように、学習した知識(コンテンツ)の量や質を重視するのではなく、当人が成し遂げることの可能な活動(コンピテンシー)を重視する傾向は経済・産業界一般のみならず、初等・中等・高等教育の領域にも及ぶこととなり、教師教育の領域においても近年、そうしたコンピテンシーのリストとして「理想の教師像」や「教師に求められる資質能力」が様々な場面で論じられるようになってきている。研究者レベルでは学校教員に求められる資質能力を同定しようとする試みが行われ、また文部科学省からは教員免許取得の要件として位置づけられた授業科目「教職実践演習」において確認すべき資質能力が例示され、さらに各地方自治体は教師の採用にあたって自らの求める教師像や資質能力を公表するようになってきている。

もっとも、ふり返ってみるならば、教師教育(教員養成)という専門職教育の領域は、その出発点からして具体的な活動能力の向上と結びついたものであり、コンピテンシー重視の動向と親和的なものであったと言える。かつて師範大学論争を手がかりとして明らかにされたように、戦前期より教師教育は学問研究を本旨とするのか(コンテンツ重視)、それとも専門職養成を主たる任務とするのか(コンピテンシー重視)という葛藤に巻き込まれ、明確な答えを出せずに来たのである。

戦前期には、教師教育が、教師の職業実践のために必要な知識・技術の伝達を目的とするものなのか、真理を発見する経験を積ませ、子どもたちを真理の発見へと導くための方法に気づかせることを目的とするのか、両者の中間を目的とするべきなのかといった点が争われたが、当時の師範学校において支配的であったのは専門職養成としての視点であった。その後、第二次世界大戦が終結すると、戦前の師範教育の狭隘さが強く批判され、大学で幅広い学問を学ぶとともに、真理の発見の経験を積むことの大切さが指摘されたが、1966年以降、宮城教育大学が東北大学から独立するとともに、ほとんどの学芸大学は教育大学へと改称され、総合大学の学芸学部も教育学部へと改称されることになる。この動きは教師教育を担う大学・学部の教育目標が、幅広い学問的知識の学習や真理の発見から、再び教師の職業実践のための準備へと戻されることにつながるものでもあったと言えよう。その後、新構想の三教育大学の設置を経て、実務家教員の採用なども推奨されるようになり、専門職大学院としての教職大学院の全国的な設置に至っている。

こうした動きは戦前期におけるコンピテンシーの重視から、戦後間もなくのコンテンツ重視、そして1960年代以降、今日にまで続くコンピテンシー重視の流れとして理解することができよう。だが、教師教育がそもそも職業との関連性を無視できないものであるとしても、教師教育が大学で行われる(大学で行われなければならない)ものだとするならば、コンピテンシーとコンテンツはどちらか一方のみで足りるものではないと言えよう。しかし、教師教育において両者それぞれがどの程度まで求められているのかに関しては、いまだ十分な研究が行われているとは言えない状況である。

教師教育が教師という職業との関連性を求められ、具体的な活動能力の向上と結びついたものであれば、その教師教育の中身を構成する中心的な学問のひとつである教育学研究もまた、コンピテンシー重視の動向と一定程度は親和性を持たざるを得ないものと言えよう。教育学を教師教育のための学問に限定することは不可能であるが、戦後、教育学を担当する教員が(旧帝国大学の教育学部を除いて)教員養成学部としての教育学部や教員免許を取得するための教職課程以外にはほとんど置かれていないことに鑑みると、教育学は好むと好まざるとにかかわらず教師教育と強くかかわらざるを得ない学問であり、教師教育の目標の変化に応じてその内容や重点を変化させることが強く求められるのだと言えよう。

そうした中、戦後は教師教育がコンテンツ重視からコンピテンシー重視へと変化し、それとともに教育学研究もまた変化を余儀なくされている。戦前期の思弁的・哲学的色彩の強かった教育学が、戦後、教育哲学、教育史、教育社会学、教育方法学、教育行政学、比較教育学、教育経営学などへと細分化し、部分的には実践的・実証的性格を備えたものの、その研究対象は(教育方法学などの例外を除いて)一般的には授業における子どもたちの学びや教師の活動など(子ども

たちや教師のコンピテンシー)とは積極的な関わりを持たないままであった。だが、「PISA ショック」以来、従来の思弁的・哲学的な教育学研究が一扫され、実践的・実証的な教育学研究にとって代われようとしているドイツの状況をはじめ、日本においても教育学研究は「実践性」や「実証性」を示すことが求められるようになってきている。しかし、教育学研究が備えるべき「実践性」や「実証性」がいかなるものなのかについては、いまだに十分な合意が得られていないと言えるだろう。「実証性」や「実践性」と言ってもその内実は多様なのである。

2. 研究の目的

以上のように本研究の中心となる学術的な問いは、教師教育の目標とコンテンツ/コンピテンシーとの関係がいかなるものかという点ならびに教育学研究に求められる「実践性」と「実証性」の内実とは何かという点である。これらの点を明らかにするため、本研究では日本とドイツにおける教育学および教師教育の理論的・制度的発展過程に着目し、検討を行うこととする。

本研究における学術的独自性と創造性として挙げられるのは、これまではドイツと日本において独立に、教育哲学や教育史、教師教育の領域において非相互参照的なかたちで議論が行われる傾向にあった本テーマを、教育理論史、教育哲学、教師教育史、教職の専門性論などをそれぞれ専門とする研究者が国際的・領域横断的なかたちで研究を進める点である。

3. 研究の方法

もっとも、これらの問いは非常に広範にわたる問題圏を成す問いであり、一定の範囲に検討対象を絞ることが必要となる。そこで、本研究では研究参加者の専門性を考慮し、以下の対象にその焦点を絞ることとした。

- ・日本における教育学の理論的発展過程
- ・日本における教育学の制度的発展過程
- ・日本における教師教育の理論的発展過程
- ・日本における教師教育の制度的発展過程
- ・日本における教師教育に関する近年の議論と改革動向
- ・ドイツにおける教育学の理論的発展過程
- ・ドイツにおける教育学の制度的発展過程
- ・ドイツにおける教師教育の理論的発展過程
- ・ドイツにおける教師教育の制度的発展過程
- ・ドイツにおける教師教育に関する近年の議論と改革動向

4. 研究成果

本研究の枠組みにおいて行われた研究活動からは、日本における教育学の理論的発展過程(主に白石による各研究成果を参照)、日本における教育学の制度的発展過程(主に鈴木による各研究成果を参照)、日本における教師教育の理論的発展過程(主に白石・鈴木・久恒による各研究成果を参照)、日本における教師教育の制度的発展過程(主に久恒・白石による各研究成果を参照)、日本における教師教育に関する近年の議論と改革動向(主に坂越による各研究成果を参照)、ドイツにおける教育学の理論的発展過程(主に鈴木・坂越による各研究成果を参照)、ドイツにおける教育学の制度的発展過程(主に鈴木・坂越による各研究成果を参照)、ドイツにおける教師教育の理論的発展過程(主に鈴木による各研究成果を参照)、ドイツにおける教師教育の制度的発展過程(主に鈴木による各研究成果を参照)、ドイツにおける教師教育に関する近年の議論と改革動向(主に鈴木による各研究成果を参照)などが明らかとなった。

これらの研究から明らかのように、日独両国のいずれにおいても、教育学はその当初から教師教育をその存在の基盤としてきたし、専門職養成としての側面を持つ以上、コンピテンシーの育成を一定程度その視野に入れざるを得ない存在であった。もっとも、久恒が示す文科大学や東北大学教育学部の事例から明らかのように、教育学と教師教育とは必ずしも親和的でない側面も持つものであった。また、そうした関係を白石は日本における教育史研究の事例を手掛かりとして論じるが、教育学と教師教育の相克は、鈴木の示す N.ルーマンの科学論からも説明されるものでもある。

なお、2023年にはドイツ・テュービンゲン大学の教師教育における中心組織である School of Education において中心的な役割を担う教員から聞き取りを行い、同大学の教員養成カリキュラムに関する調査を実施するとともに、2024年には日独シンポジウムを開催し、同機関の取り組みについて報告を得た。同機関の事例からは、教師教育における質の改善、関係者の参加促進とネットワーク化、教師教育へのイノベーションの導入などが重要な要素となることが確認された。そして同じく重要となるのは、パラダイムに関する開放性、多様な関係者の参加促進と彼らのネットワーク化の促進、広い課題の幅を確保すること、階層的構造に基づき強権的に進めるのではなく関係者において納得を生み出すことなどであった。こうした体制の下、全学的に有機的つながりをもったかたちで生み出される教師教育カリキュラム(個々の授業だけでなく各種の研究会やワークショップ、インターンシップなども含まれる)の効果は、歴史的発展過程において一定程度の共通性や類似性を有する日独の教育学研究が等しく重要視すべきものであり、日本における教師教育の改善に向けても大きな示唆を与えるものであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 16件）

1. 著者名 白石崇人	4. 巻 第89巻第2号
2. 論文標題 澤柳政太郎『実際の教育学』の実証主義再考 20世紀初頭の科学史・教育学史・教師の教育研究史における意義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 40-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.89.2_220	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 第89巻第2号
2. 論文標題 科学システムとしての教育学と教育実践の関係性再考：N. ルーマン科学論における学問領域の細分化過程と観察の多元性に関する議論から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 258-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.89.2_258	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白石崇人	4. 巻 第9号
2. 論文標題 日本教育史研究における「教育学としての教育史」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島文教大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 第28号
2. 論文標題 社会構成主義から捉えた道徳教育における「権利」の学習における注意点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 道徳教育方法研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂越正樹	4. 巻 123
2. 論文標題 世界の教育哲学との対話(1)ドイツ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 114-122
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久恒拓也	4. 巻 67
2. 論文標題 教師教育におけるコンテンツとコンピテンシーの関係性の歴史的研究(2) - 新制東北大学の教師教育者高橋金三郎の事例から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学研究紀要(CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 124
2. 論文標題 「直接体験」対「間接体験」という対立図式の限界と観念のシステム間共同構成プロセスの検討 : N・ルーマンの学習論を手掛かりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 58-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 茂見剛、鈴木篤、田上哲	4. 巻 6
2. 論文標題 学校カリキュラムにおける「総合的な学習の時間」の役割の再検討 : 社会システム理論およびデューイの教育論を手掛かりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学教職課程研究紀要	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 草野舞、塚野慧星、鈴木篤	4. 巻 6
2. 論文標題 道徳授業における「道徳的価値」の機能と教師による価値解釈に関する理論的再検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州大学教職課程研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 88(1)
2. 論文標題 ニクラス・ルーマンの学級論に関する検討－非対面型授業の対面型学校教育への代替可能性と限界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソグラフィ的研究(10)1980年以前の北海道大学教育学部スタッフのバイオグラフィー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 149 - 159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 42(2)
2. 論文標題 日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソグラフィ的研究(9)1980年以前の大分大学文学部・人間科学部スタッフのバイオグラフィー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 137 - 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 42(1)
2. 論文標題 日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的發展過程の一側面に関するプロソポグラフィ的研究(8)1980年以前の名古屋大学教育学部スタッフのバイオグラフィ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 13 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 13
2. 論文標題 戦後日本のアカデミズムにおける道德教育論の歴史(3): 1970年代中頃から1980年代末までの出版物を手掛かりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 39 - 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木篤	4. 巻 38
2. 論文標題 (資料整理)学問領域としての「教育学」とそのサブディシプリンの再検討に向けて: 戦後日本の国立研究大学教育学部等における教育学関係講座名称の変遷ならびに教育学関係諸学会の名称と設立経過	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 79 - 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久恒拓也	4. 巻 66
2. 論文標題 教師教育におけるコンテンツとコンピテンシーの関係性の歴史的研究 - 新制東北大学の教師教育者の事例から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 650-655
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石崇人	4. 巻 7
2. 論文標題 1880～1930年代日本の教育学における科学的基礎づけ問題 教育事実の実証的研究の問題化と「教育科学」・「日本教育学」の制度化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島文教大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 45 - 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石崇人	4. 巻 35
2. 論文標題 現代日本社会における教育制度の課題 格差・AI・人口減少社会における主体的・対話的で深い学び、オンライン学習	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島文教教育	6. 最初と最後の頁 69 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久賀隆之・白石崇人	4. 巻 35
2. 論文標題 社会的な見方・考え方に基づいた「問いを表現」する歴史教育 高等学校「日本史探究」を想定した実践開発を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島文教教育	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 篤	4. 巻 12
2. 論文標題 戦後日本のアカデミズムにおける道徳教育論の歴史 (2) : 1970 年代中頃までの出版物を手掛かりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学高等教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 篤	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions(6)Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 篤	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions(6)Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980(3)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 149-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久恒拓也	4. 巻 40
2. 論文標題 戦後教員養成における教育実習の実態に関する研究 : 1950年代の新制東北大学の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新見公立大学紀要	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山中 翔, 山内 優佳, 渡邊 満, 坂越 正樹, 中尾 豊喜	4. 巻 2
2. 論文標題 「総合的な学習の時間」における「主体的・対話的で深い学び」に関する一考察 異なる多様な他者との対話の実現に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間健康学研究	6. 最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久保田 周子, 鈴木 篤	4. 巻 21
2. 論文標題 翻訳 テュービンゲン大学School of Education の事例から見る教師教育制度化のメルクマール	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育基礎学研究	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白石崇人	4. 巻 58
2. 論文標題 現代日本における教育史教育の課題 歴史教育・高大接続・教員養成を意識した「教育学としての教育史」の教育の模索	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 広島文教大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shiraishi Takato	4. 巻 2024
2. 論文標題 The Role of Pedagogy in Secondary Teacher Training in Early Twentieth-Century Japan: Theory of Pedagogical Research in College by Kumaji Yoshida of Tokyo Imperial University	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 History of Education	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/0046760X.2024.2306985	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久恒拓也	4. 巻 69
2. 論文標題 高等師範学校を前身とする帝大系教育学部での教育学教育に関する考察 新制名古屋大学教育学部教育学科を事例として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育学研究紀要 (CD-ROM版)	6. 最初と最後の頁 148-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 久恒拓也
2. 発表標題 義務教育教員養成を担う帝大系教育学部での教育学教育に関する考察 新制東北大学教育科学科を事例として
3. 学会等名 日本教師教育学会第32回大会, 秋田大学(秋田市・Web)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久恒拓也
2. 発表標題 教師教育におけるコンテンツとコンピテンシーの関係性の歴史的研究(2) - 新制東北大学の教師教育者高橋金三郎の事例から -
3. 学会等名 中国四国教育学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白石崇人
2. 発表標題 日本教育学史をどう描くか? 1880~1930年代における科学的基礎づけ問題とその後の展望
3. 学会等名 教育学史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsushi Suzuki
2. 発表標題 Development and Diversification of Academic Subfields of Education Research in Japan and Germany after the Occupation after World War II: A comparative Analysis of Collective Biography of Staff Members for Education Research in Both Countries
3. 学会等名 WERA VIRTUAL FOCAL MEETING 2021 PROGRAMME (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久恒拓也
2. 発表標題 教師教育におけるコンテンツとコンピテンシーの関係性の歴史的研究 - 新制東北大学の教師教育者の事例から -
3. 学会等名 第72回中国四国教育学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木 篤
2. 発表標題 名古屋大学教育学部ならびに大阪大学人間科学部とその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソグラフィ的研究
3. 学会等名 教育史学会第63回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久恒 拓也
2. 発表標題 戦後教育改革期において教育実習は被教師教育者にどうみられていたのか 文理科大学生の実習記録（1947年）を手掛かりに
3. 学会等名 教育史学会第63回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木 篤
2. 発表標題 九州大学教育学部ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソグラフィ的研究
3. 学会等名 九州教育学会第71回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白石崇人
2. 発表標題 現代日本における教育史教育の課題 歴史教育・高大接続・教員養成を意識した「教育学としての教育史」の教育の模索
3. 学会等名 日本教育学会第82回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白石崇人・井上快・三時眞貴子
2. 発表標題 沼田家文書にみる知と近代教育 エゴ・ドキュメントによる教育史研究の可能性（ラウンドテーブル）
3. 学会等名 中国四国教育学会第75回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白石崇人
2. 発表標題 戦前日本の教員養成に対する教育学の役割（試論）
3. 学会等名 日独ミニシンポジウム「教育学と教師教育を問い直す」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takato Shiraishi
2. 発表標題 'The Position of "History of Education as Educational Studies in Japan
3. 学会等名 International Workshop on the Development of Educational Science in Japan and Germany
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 久恒拓也
2. 発表標題 高等師範学校を前身とする帝大系教育学部での教育学教育に関する考察 - 新制名古屋大学教育学部教育学科を事例として -
3. 学会等名 中国四国教育学会第75回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久恒拓也
2. 発表標題 戦後初期の「大学における教員養成」体制の構築と「教師の資質・能力」観
3. 学会等名 日独ミニシンポジウム「教育学と教師教育を問い直す」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takuya HISATSUNE
2. 発表標題 The Reorganization of Teacher Education in Post War Japan and the History of the Faculty of Education at the National University
3. 学会等名 International Workshop on the Development of Educational Science in Japan and Germany
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 鈴木篤
2. 発表標題 道徳教育を通して「震災の記憶」や「郷土への思い」を豊かなものにするには - N. ルーマンに基づく再帰的学習モデルを手掛かりに -
3. 学会等名 日本道徳教育方法学会第29回研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Atsushi SUZUKI
2. 発表標題 The Research Context as an Introduction to the German-Japanese Mini-Symposium
3. 学会等名 日独ミニシンポジウム「教育学と教師教育を問い直す」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Atsushi SUZUKI
2. 発表標題 The Process of Subdivision of Education Studies in Japan: The Names of Academic Societies and Their Journals, the Denominations of Professorships, and the Curriculum Titles Stipulated by the Teachers' Licensing Act.
3. 学会等名 International Workshop on the Development of Educational Science in Japan and Germany
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 鈴木篤	4. 発行年 2023年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 583
3. 書名 日本における教育学の発展史：教員の集合的屬性に着目したプロソポグラフィ	

1. 著者名 白石崇人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 16
3. 書名 貝塚茂樹・広岡義之編『教育の歴史と思想』（「第八章 国民教育の始動 明治期の教育」）	

1. 著者名 坂越正樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 15
3. 書名 坂越正樹、湯川秀樹、湯川嘉津美、神長美津子編著『教育原理』（該当章「第1章 教育とは」）	

1. 著者名 中原朋生・池田隆英・楠本恭之編／木下祥一・白石崇人・平松美由紀・光田尚美・山本孝司・龍崎忠（第4章執筆 白石崇人）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 12
3. 書名 なぜからはじめるカリキュラム論（第4章 日本における教育課程の理念（戦前） なぜ社会・国家のために教育するのか？）	

1. 著者名 坂越正樹監修、八島美奈子・小笠原文・伊藤駿編著（序章執筆 坂越正樹）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 10
3. 書名 未来をひらく子ども学（序章 子ども学とは 実践学としての子ども学の構築）	

1. 著者名 クラウス＝ペーター・ホルン、鈴木 篤	4. 発行年 2023年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 386
3. 書名 ドイツにおける教育学の発展史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久恒 拓也 (Hisatsune Takuya) (30781257)	新見公立大学・健康科学部・講師 (25302)	
研究分担者	白石 崇人 (Shiraishi Takato) (00512568)	広島文教大学・教育学部・教授 (35407)	
研究分担者	坂越 正樹 (Sakakoshi Masaki) (80144781)	広島文化学園大学・学芸学部・教授 (35412)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 日独ミニシンポジウム「教育学と教師教育を問い直す」	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 International Workshop on the Development of Educational Science in Japan and Germany	開催年 2024年～2024年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	ゲッティンゲン大学	ベルリン・フンボルト大学	テュービンゲン大学